



ひょう いし なに 火打ち石は何でできているの

フリント（石英の一種）や黒よう石など

ひょう いし は、フリントというせきえい いっしゅ、こく せき、けい石、玉 ずいなどのがんせき つかわれてきました。フリントには、はいいろ こくしよく、あお、みどり、きいろの色があります。

これらのがんせきは、かたくて、われくちがするどいので、いし う あ、ひ お、火を起すのに適しています。

ひょう いし は、火を起すときにつか いし、つか、初めは、ひょう いし どうしをうちあわせて、ひ お、火を起していました。

その後、ご ひょう がね ひょう がま、て、あお、もくざい、こうてつ、鋼鉄をはめこみ、これにいし う、ちつけてひばな だし、ひ お、火を起すようになりました。

おこした火をうつしとる

ひょう いし おこした火を、うつしとるもの（ほくち、むかし、昔は、くさったき、木や、ガマ、アサ、イチビなどのしよくぶつ、植物のくきを焼いて、け ずみ、こな、粉にしたもの）を使っていました。

その後、ご、ツバナ（チガヤ）やガマのほ、穂や、えんしょう、しょうさん、煙硝（硝酸カリウム）などをくわ、あか、くろ、赤、黒、などにそめたものが、う、売られるようになりました。（監修・青木 国夫）

